

(記入日：2021年8月30日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

江戸のエコ学 (2~4年, 共通教育選択, 前期2単位)、折り紙コーディネート演習 (2~4年, 共通教育選択, 前期2単位)、カラーコーディネート (2) (2~4年, 専門教育選択必修, 前期2単位)、生活アート論 (2~4年, 専門教育選択必修, 前期2単位)、被服実習Ⅱ (立体) (3年, 専門教育選択必修, 前期1単位)、複数教員科目：医療事務総論 (1~3年, 専門教育選択, 前期2単位)、医療秘書実務実習演習 (事前・事後指導) (3~4年, 専門教育選択, 通年1単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・目標は、日常生活の中から物事の起源や先人たちの知恵などを理解し、現代の身の回りにある資源や環境に関わる問題点を多角的に視る姿勢を身につけることである。さらに、問題解決に結びつく工夫や自然との共生社会の仕組みを知り、SDGsな社会になるため各自が出来ることを養うことである。また、実践を通して日本の文化を知ること、コミュニケーションスキルをアップさせ、生活に反映させる。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

対面授業とリモート授業のハイブリット型になった。

江戸のエコ学、折り紙コーディネート演習、カラーコーディネート (2)、では、授業開始までに教科書入手が間に合わなかった。そのため、リモート授業では、学生が主体的に学習出来るようにシラバスに合わせた資料をスキャンし、pdfに変換し、teamsにアップし、前もって授業の予習が出来るようにした。授業日は、teams会議を使用して双方型授業を行い、アップした資料の解説をした。また、formsを使用し、授業内容の振り返りや次週までの予習などを記入して送信させた。試験に代わってレポート課題とし、提出された課題については、コメントをつけてフィードバックした。

折り紙コーディネート演習では、目白キャンパスで開講ということもあり、ほとんどがリモート授業となった。演習科目で、特殊用紙を使用するため、材料は一人ずつ袋にセットして、数回の対面授業時を利用して各自に配布した。当日欠席の学生には、レターパックを利用して送付した。授業としては、折り図を事前にアップし、書画カメラをPCに接続してteams会議を利用してリアルタイムの双方向型授業を行った。途中追いつけない学生とは、チャットで確認しながら進め、最後は各自で完成したものをモニター越しに提示してもらった。また、教科書の中に、冠婚葬祭時のマナーやしきたりのページがあるので、現物を見せながらの授業も行い、生活の中にある日本の文化について解説を試みた。

カラーコーディネート (2) と生活アート論では、対面授業を3回行い演習課題の実践に取り組み、後日のteams会議の双方型授業を利用し、各自演習課題の成果を発表し、講評を行った。カラーコーディネート (2) では、work paper とファッションマップ制作に配色カード 158a を使用して具体的に色の効果について学習し、作業を通して理解出来るようにした。生活アート論では、衣食住のアート効果について、身の回りの事象を例に知ること、衣の根源と言われる「フェルト」の成立ちについて具体的に実践を通して理解を試みた。

被服実習Ⅱ（立体）は、教職課程（家庭科）の必修であるが、ミシンやアイロン等を使用するため対面授業で行い、各自の採寸、製図、布裁断、仮縫い、補正等、本を見るだけでは理解出来ない内容を一人一人に合わせて行うことが出来たため、各自は自身の体型の特徴を理解することが出来た。

医療事務総論と医療秘書実務実習演習（事前・事後指導）については、医療秘書実務士資格取得のための必須科目で、3年または4年で病院実習に行くため必要なスキルを学習する内容である。本来、対面授業の予定であったがリモート授業となったため、担当教員（非常勤教員：清田悟）に毎回資料をメール添付してもらい、その資料を高橋が teams にアップして当日のリモート授業に臨むスタイルとなった。後半は、教科書を使用しながら資料と突き合わせをして振り返りをした。授業は、非常勤教員が中心であったが、高橋は毎時間資料をアップしリモート授業に参加し、学生と授業内容を共有した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

新型コロナウイルスの影響で対面授業からリモート授業になったが、学生のインターネット環境の差が大きく（家族全員でリモートをしている場合、Wi-Fi の容量に問題がありフリーズしてしまう）戸惑いがあった。そこで、アップする資料には、なるべく解像度を小さくした図や画像を使用して、具体的に理解し易くする工夫をした。外出自粛のため図書館等で参考図書を借りることが困難で課題をこなすのが大変だとの声があったが、課題内容を工夫したため、教科書を利用し、普段何気なく使っている物や見ている物に関心を持ち、理由や仕組みがあることを現実的に理解することで、生活の中に活用できるようになったと思われる。

特に、折り紙コーディネート演習では、初めて書画カメラを PC に接続し teams 会議を利用したりリアルタイムの授業であったが、時折ズームしたりすることで学生からは折り図を見ながら、手元も各自の画面からアップで見ることが出来たのでとても分かり易かったという感想が多かった。また、目白キャンパスの学生であるため、インバウンドが回復した際には、折り紙文化を活用したいという感想も多かった。また、江戸のエコ学も履修している学生が多かったことから、江戸の文化と共に日本の伝統的なおもてなしの実践教育が出来たと示唆する。

被服実習Ⅱ（立体）では、実習のため対面授業をしたが、ミシン等自宅にない学生もいるため、リモート授業では不可能であった。さらに、中高家庭科の授業でミシンを使用していない学生もいることから、中高家庭科の授業内容の振り返りが不可欠と感じた。

5 今後の目標（これからどうするか）

今回の様に不測の事態（災害や感染症等）がいつどの様に起こるか分からない状況で、今後も PC やインターネット環境が不可欠となり、AI や IOT 等が普及し電力や他のエネルギー消費量が増大する生活になると予想される。そして、共生社会の仕組みを知り、SDGs な社会になるため各自が出来る力を養うことが大切になる。そこで、生活文化学科の学生だけではなく他学科の学生にも、衣食住の学びを通して人間の持っている五感を使い、災害等のように様々なエネルギーを使用できないときにも先人たちの知恵や工夫を活用して生きる力を身に付けて欲しい。しかし、リモート授業のみでは、学生の様子（体調や問題点等）や変化に気づいてあげられず、孤立してしまう学生もいるのではないかと思う。

特に、教員側からは、地方からの 1 人暮らしの学生が、コロナ禍の不安な中で相談出来る環境にあるかどうか分からないため、今後もリモート授業の利点と対面授業の利点をミックスしたハイブリッド

型授業の必要性を大いに感じた。そして、学生の不安材料を少しでも減らせるような対策とコミュニケーション力を維持しつつ、新しい生活様式に対応し大学生活が充実したものになるような授業を検討したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 『江戸の暮らし 衣・食・住』 諏訪書房
- 2 宮田章司『江戸のくらしとリサイクル』 絵本塾出版
- 3 『大江戸くらし図鑑』 洋泉社 Mook
- 4 山本博文監修「衣大人の教養図鑑『江戸入門』くらしと仕組みの基礎知識」、河出書房新書
- 5 小林一夫『喜ばれる素敵な折り紙』 池田書店
- 6 NPO 法人国際おりがみ協会監修、小林一夫『折り紙 ORIGAMI』(株)文溪堂
- 7 大関徹他監修『ファッション&ビューティーの色彩』、日本色研事業(株)
- 8 七江亜紀監修『知って役立つ色の事典、』 宝島社
- 9 『カラー&ライフ』、日本色研事業(株)
- 10 「work paper」 配色実習台紙、日本色研事業(株)
- 11 『日本のかたち』 平凡社
- 12 『Casa BRUTUS』 MAGAZINE HOUSE
- 13 まるやまはるみ『誌上パターン塾・Vol.3 パンツ編』 文化出版局
- 14 まるやまはるみ『誌上パターン塾・Vol.4 ワンピース編』 文化出版局
- 15 有吉澄江他編著『病院事務のための医療事務総論/医療秘書実務』 建帛社

ティーチング・ポートフォリオ

学科：生活文化 氏名：高山啓子

(記入日：2021年 9月 27日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール (必修 2 単位)、プレゼミナール (必修 2 単位)、景観論 (選択必修 2 単位)、観光社会学 (選択必修 2 単位)、観光文化実践 II (選択必修 2 単位)、フィールドワーク法 (選択必修 2 単位)、観光文化入門演習 (必修 2 単位)、観光文化専門演習(1)(2)、卒業研究、卒業研究演習、社会学／社会学(1) (選択必修 2 単位)、統計と社会 (選択 2 単位)、社会学概論 (生活文化学科必修 2 単位)、社会学特論 (生活文化学科選択必修 2 単位) ジェンダー社会論特論(1) (大学院選択必修 2 単位)、ジェンダー社会論演習(1) (大学院選択必修 2 単位)、女性学専門研究演習 (大学院) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

社会のさまざまな現象 (観光を含む) に対して学生自身が関心を持ち、それぞれの問いを立て、分析できるような機会をつくること、またそれらを協同して行えるようになることを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

講義形式の授業では、学生がその回のテーマに関する課題 (シラバス事前学修で提示したもの他) について自分の考えをまとめたものを提出するという方法をとっている。また授業内で複数の問いについて考えを述べてもらっている。基礎ゼミナール、入門演習、専門演習、観光文化実践などでは、文献や資料に基づく研究報告を行ない、ディスカッションによる相互の意見交換を行っている。観光文化実践では観光ガイドとモデルルートの作成を課題としている。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

各科目において、比較的学生の自主的な関心を高め、自分の考えを持たせることができた。学生によって、取り組みにばらつきはある。今年度は学生相互のディスカッションができる場が少ないが、オンラインでのチャット機能やアンケート機能を使用して意見を述べてもらい、相互にさまざまな意見を聞き、知識や考え方の幅を広げることができている。

5 今後の目標 (これからどうするか)

自主的な取り組みに消極的な学生にそれを促す方法、また学生が積極的にディスカッションに参加する方法を検討したい。またより意欲のある学生に対する、別の課題などを検討したい。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

授業で提出された課題、レポート (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

永嶋久美子

(記入日：2021年8月6日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール (1年前期必修科目2単位), 調理学実験 (2年前期選択必修科目1単位), 給食管理実習 (1) (3年前期選択必修科目2単位), 給食管理実習 (2) (3・4年選択必修科目1単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、科学的根拠に基づいた食、栄養、健康、調理を理解し、その問題解決に向けた行動をPDCAサイクルによって主体的に取り組む力を身に付けることである。また、これらの力を身に付けた実践力のある栄養士を目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学習を進めるにあたり、各科目では一般的な事例をあげ科学的根拠の学習、基準、技術の習得を進めている。また、授業後の学習の振り返りのためのワークシートを作成し、課題とした。提出された課題はコメントを入れ、質問などは次の授業で解説するなどのフィードバックをした。調理学実験は対面授業であったが、各回の実験のレジюме、レポートフォーマット、図表フォーマットを Teams で配信した。レポートは Teams の課題にて提出し、ルーブリックを活用して評価し、コメントと共に次回授業までにフィードバックした。給食経営管理論では身近な事例および給食施設の事例を例に挙げ、ワークシートを活用しながら学習を進めた。実際の現場の状況を学ぶため映像資料などを活用した。給食管理実習 (1) は対面授業で実施した。授業に使用する資料は Teams のファイルで共有した。また、実習においては、コロナウィルス感染予防のための衛生手順を実践し、試食においても密を防ぐため、すべて弁当形式で実施した。試食の評価等は Forms を活用し、PDCA サイクルにより実習を改善しながら実施した。給食管理実習 (2) は遠隔授業を実施した。3年次後期に実施した学外実習の振り替りおよび様々な実習施設の特徴について学ぶことを目的とした。Teams により授業を進めたが、グループワーク、発表、アンケート調査などを Teams, Forms を活用して実施した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

すべての科目において対面授業，遠隔授業にかかわらず，学生相互が自主的に学び合い，授業時間外に学修時間を設けていることが確認できた（エビデンス 1）。調理学実験，給食管理実習（1），給食管理実習（2）のレポートおよび報告書などの作成では専用の教材を使用した（エビデンス 2）。調理学実験および給食管理実習（1），（2）では参考資料およびワークシートを配布し，事前・事後学修を促すとともに実践的な理解につながった（エビデンス 3）。給食管理実習（1）・（2）では現場における実践状況を理解するため映像教材を活用したところ，基礎的学習内容を実践的な視野でとらえることにつながった（エビデンス 4）。

5 今後の目標（これからどうするか）

調理学実験および給食管理実習（1）などで学生同士が授業時間外に検討，議論し，資料収集，データ分析などを行う機会を増やす（ラーニング・コモンズ）。また，事前・事後学修を継続的に進められるよう，資料収集及び分析などの具体的提示を行う。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 リアクションペーパー（非公開）

- 2 テキスト 大羽和子他（編著）（2003）調理科学実験 学建書院
岡本裕子他（編著）（2019）給食経営管理テキスト 学建書院
文部科学省（2011）調理場における衛生管理&調理技術マニュアル 学建書院
桑田てるみ（編）（2013）学生のレポート・論文作成トレーニング 実教出版

3 参考資料およびワークシートなどの配付（非公開）

- 4 映像資料 金田雅代（総監修）（2014）学校給食管理実践ガイド 丸善 等

ティーチング・ポートフォリオ

今井久美子

(記入日：2021 年 8月 26日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

前期は栄養士の専門教育科目である栄養指導論(1)(2年選択必須科目、2単位)、臨床栄養学、(2年選択必須科目、2単位)、公衆栄養学(3年選択必修科目、2単位) 栄養指導基礎実習(3年選択必修科目、1単位)、を担当した。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、社会学士としての栄養士育成である。栄養士の役割の一つに、健康維持・増進および生活習慣病予防と重症化予防、疾病の治癒と重症化予防に対する栄養基準を求め、基準に従った食の提供がある。よって、対象者とその周りの社会環境などを理解し、科学的根拠に基づき客観的な情報の解析、栄養問題点を見出し、主体的に問題解決ができる基礎的な知識と実践的な能力、併せ人が対象であることを忘れない心を身に着けた学生の育成に努めている。また、食を介した自己の健康管理の必要性と重要性の気付きも目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

今年度の前期科目実践の工夫を記す。コロナ感染対策および本学の授業内容に従い、リモート授業と対面式を併せ実施した。なお、3年生の給食実習時は、まん延防止の措置期間であったが、2年次学生は、給食の試食(各自に弁当が配付)が栄養士の履修として必要であるため、大学に来る必要性から2科目とも対面授業が余儀なくされた(大学に申請書類提出)。リモート授業は、TeamsにてPDF資料(PowerPoint、Word、Excel)やURLの資料を学生に見せながら行った。授業時に必要な資料や課題プリントは、Teamsおよび対面授業の際に配布した。講義時間は、30分～45分とし、残りの時間は、授業の振り返り学習とした。授業時間60分以上必要な場合は、学生の上承を得た。出席は点呼としたが、ネット環境が困難な場合は、チャットかメールで連絡するようにアナウンスした。対面授業は、資料の配付と同時にTeamsに投稿、授業はPDFを用い、アクティブ・ラーニングを取り入れた。振り返り学習や課題はFormsやTeams、プリントを使用した。学生からの質問は、速やかに、丁寧に回答するように心がけた。課題やレポートは、コメントを付け返却した。試験は実施せ

ず、事後学習と課題にて成績を評価した

4 成果（どうだったか：結果と評価）

今年度のリモート授業は、昨年よりはスムーズに運営できた思いもあるが、一年ぶりの対応に戸惑ったことは否めない。さらに、この不規則な授業形態は、担当者としては、資料の作り方、配付法、授業の進め方をその都度、状況に応じなければならないという難題が課せられた。学生も、その都度、授業の内容についてこなければならず大変であったと想像した。しかし、栄養指導基礎実習において、情報解析、計算や食事状況分析などは、対面授業がよかったという学生の評価はあったが、講義は、多くの学生が、こうした状況下でも熱心に習得している評価が読み取れ、嬉しい思いである。一方、やらない学生がいることも浮き彫りにされた。学習習慣の乏しい学生が大半を占める本学科では、振り返り学習や課題の提出などは学生の学習の習慣化につながったと推察できる。

5 今後の目標（これからどうするか）

コロナ感染拡大という事態が継続し、必然的に（？）新しい授業形態が模索されているであろう。対面授業は、学生に寄り添うことができる。リモート授業は、画面を介し、一方的に進め時間通りに終わるが、学生の様子は見えない。

今後 ICT 教育を受けた学生が入学し、教科書も資料も iPad など配信されるであろう。大学の教員は、ICT 教育世代とどう向き合うのか未知数である。教員も時代に遅れないようにすべきと思うものの、残り少ない老体の教員である私は敢えて、本来掲げるべき目標から外れることを許し頂きたい。ICT 教育により育まれた学生は、ボタンやキーボードを押して知識を得てきたであろう。もちろん悪くはないが、筆圧の低い薄い字の学生の手書きのレポートを読むたび、文字を書く必要性を感じている。理由は、大学生であっても知識の定着は、やはり文字を書くことから始まると思うからである。このような心配は本学科だけかもしれないが、今後とも、手書きによる課題を課し、学びが定着することを目標としたい。知識が定着してこそ、新たな疑問や興味をもたらす。主体的な学びで満足感を味わってこそ、真の ICT 教育の意義があると思っているからである。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1) 担当者作成プリント（非公開）
- 2) テキスト 相川りゑ子、會田久仁子、今井久美子他（2020）、 Nブック

- ス 三訂 栄養指導論、建帛社
- 3) テキスト 渡邊早苗、本間和宏、佐藤智英編著、若菜宜明、今井久美子他
(2021)、Nブックス 臨床栄養学概論[第2版]、建帛社

ティーチング・ポートフォリオ

大坂 佳保里

(記入日： 2021年9月22日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

食生活論(1年前期選択必修2単位)、食品加工学(3年前期選択必修2単位)、
フードスペシャリスト論(3年前期選択2単位)、食品の官能評価と鑑別(3年前
期選択2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

多様な社会環境に対応できる社会力と豊かな感性を有する栄養士や栄養教
諭、家庭科教諭の養成、フードスペシャリスト等の食関連資格の取得、栄養
士としての知識とフードスペシャリストとしての知識を融合させた加工食品
の商品開発を通し、食を多角的に捉える力を育成する。学生は多様な知識の
習得により社会や家庭で活躍・応用できる実践力を身につけ、その結果とし
て健康や豊かな生活創造者として社会や家庭に寄与できるようになることが
教育目標である。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

作成した講義資料や補足資料の配布により、授業の理解度や学習意欲の向
上を図った。特にカラー画像の資料を提供することで、理解度が深まるよう
にした。また課題や演習問題の提出を求め、復習と同時に授業の習熟度を確
認にし、再説明や関連資料の情報提供などを行うことで、学修が順当に進む
ように指導した。自身の食生活調査では、調査紙や集計表の完成、それを基
にしたレポート作成の方法を指導した。

授業は遠隔と対面で行ったが、遠隔授業では学生が課題制作や授業内容に
対して質問が可能なように質問時間を設け、常に授業時間内は待機してすぐ
に対応できるようにした。また対面授業では、遠隔授業で理解が困難だと考
える項目について、再度説明を行うなどして学生の理解が深まるようにした。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

授業の復習は課題や演習問題をすることが中心で、予習はテキストを読む
ことが中心であったが、一定の学修時間が確保されていることが確認できた
(エビデンス1)。食生活調査では実施感想の発表やレポートを通し、栄養士
を目指す自覚が醸成しつつあることが確認された (エビデンス2)。

5 今後の目標（これからどうするか）

本年度も遠隔授業を導入せざるを得ない期間があり、通学を控えることにより特に1年生では上位学年とのコミュニケーション不足が認められた。その結果、昨年と同様に栄養士としての専門知識を垂直方向に捉えることや他の栄養士の科目との関連性を見いだせていない事例が散見された。前期で終了した科目内容を踏まえ、関連科目のテキストを授業に取り入れることで、横断的に専門知識を集積して理解を深めるように指導したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 コメントペーパー（非公開）
- 2 調査票（非公開）、レポート（非公開）
- 3 参考資料 共著（2014）地域食材大百科

ティーチング・ポートフォリオ

齋藤 美重子

(記入日：2021年9月1日)

1. 教育の責任

担当科目：社会生活入門(1)(1年前期必修科目2単位)、社会生活入門(2)(1年後期必修科目2単位)、消費生活論(2～4年前期選択必修科目2単位)、家庭科教育法Ⅰ～Ⅲ(2～4年前期後期選択必修科目2単位)、コミュニケーション能力基礎演習(2年前期必修科目)、生活文化専門演習(3年通年必修科目4単位)ワーク・ライフ論(2～4年後期選択科目2単位)、フードビジネス入門(2～4年後期選択必修科目2単位)、ワーク・ルール論(2～4年後期選択必修科目2単位)、家庭科教育法(2～4年後期選択必修科目2単位)、家庭(1～4年後期選択必修科目2単位)

2. 理念

私の教育理念・目標は、学生が生活者の視点を持ち、生活と世界・自然とを総合的に捉え、かつ生活課題を科学的に分析して、人と社会・環境との関係性を探究する力をつけることである。現代社会を多面的に探究し本質を熟考することをおして、人間関係形成能力、論理的思考力、課題発見・判断能力を培い、自分らしい最善の生活を営み、将来にわたり学び続ける態度を育成するとともに、社会に貢献できる人材を育成することである。

3. 方法

社会生活入門、フードビジネス入門、消費生活論、家庭科教育法では、ICTを活用し各自の課題探究と、ブレインストーミングやKJ法を用いたグループ学習により多様な意見を吸収させ、発表、再び個人で考察する時間を設けるといった往還の中で深い学びを促す。また、資料提供と課題探究学習による反転授業を行う。さらに、パワーポイントやDVDなど視聴覚教材により学習の理解促進を図る。

生活文化専門演習では、文献資料の担当部分についてレジュメを作成・発表させ、理解を深め現状分析を促す。今年度はコロナ禍のため、認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長とのオンライン会議を行い、貧困の現状についてディスカッションを行い、オーセンティックな学びを得た。

コミュニケーション能力基礎演習では、学生同士の対話や主体性を促進させるために、ICTを活用したプレゼンテーションを行う。家庭科教育法では、学習指導要領を詳細に検討し、学習指導案の作成と学生相互の評価を行う。知識と実習を融合させて知識の定着を図ったり、ICTを活用した授業を行うなど、よりよい教育方法について授業案を作成することをおして探究させる。模擬授業の実践、学生相互評価により振り返って、再度修正した模擬授業案を作成させることで学びを深める。

4. 成果

すべての科目において、学生が真摯に課題に取り組み、授業時間外に学修時間を設けているこ

とがわかった(エビデンス①、②)。生活文化専門演習では文献資料の理解を深め、さらに現状把握と今後の課題について探究できた(エビデンス①)。家庭科教育法、コミュニケーション能力基礎演習では、学生同士が主体的に学び合ったことが確認できた(エビデンス①)。

5. 今後の目標

今年度もコロナ禍で、オーセンティックな学びをもたらす専門家や実践家を招聘することも異世代交流もできなかったため、来年度以降は再開させ人間関係形成能力を高めたい。また、フィールドワークはZOOMを使用したオンライン会議により代用したが、コロナ収束後は再開させ、現状分析を促したい。

ラーニングコモンズを活用し、学生同士が授業時間外にも対話をして、資料収集やレポートを検討する機会を増やす。また、リアクションペーパーをさらに活用し、再考を促して生涯をとおして学び続けるよう、主体的に学ぶ態度を育成したい。

6. エビデンスとなるもの

①リアクションペーパー(非公開)

②レポート(非公開)

③生活文化学科ホームページ(公開)

<https://www.kgwu.ac.jp/2021/05/26/1e5b9b4e5bf85e4bf%ae38080e7a4be%4bc%9a%7949fe6b4bb%585a5e99680ef%bc881ef%bc89e68e88e6a5ad%e9a2a8e699af/>

④テキスト：佐藤真弓・齋藤美重子編著(2020)『自然と社会と心の人間学』一藝社

プレゼンテーション研究会(2015)『学生のためのプレゼンテーション・トレーニング』実教出版

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編 平成29年7月』東洋館出版社

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編 平成29年7月』開隆堂出版

文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 家庭編 平成30年7月』教育図書

⑤参考資料及びワークシートなどの配布(非公開)

⑥映像資料：特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター(PARC)「スマホの真実」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター(PARC)「プラスチックごみ」

コレクティブハウスかんかん森 居住者組合「森の風」「つながって、暮らそう！～10年目の、コレクティブハウスかんかん森～」

Andrew Morgan 監督「THE TRUE COST」,

「awareness test」, 「The future of work」

東京学芸大学次世代教育研究推進機構「21CoDOMoS」

www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/news/21codomos.html

ティーチング・ポートフォリオ

佐久間美穂

(記入日：2021年 9月 25日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

- ① 幼児教育学科：基礎ゼミナール (1年前期必修2単位)、社会福祉 (1年前期選択必修科目2単位)、子ども家庭福祉 (1年後期選択必修科目2単位)、社会的養護Ⅰ (2年前期選択必修科目2単位)、子ども家庭支援論 (3年前期選択必修科目2単位)、社会的養護Ⅱ (3年後期選択必修科目2単位)、保育実習演習Ⅱ事前・事後指導 (3年通年選択必修科目2単位)、保育実習Ⅱ (3年生通年選択必修2単位) 等
- ② 生活文化学科：社会福祉概論 (2年前期必修科目2単位)、社会福祉概論 (医療秘書実務士科目2単位)、高齢社会論 (2年後期選択必修科目2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

保育士、栄養士、医療秘書実務士の資格取得、中学家庭・高校家庭科教員として必要となる社会福祉関連の専門的知識・技術の習得と主体的に適応できる能力の育成を目指す。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

遠隔授業の特性を活用し、学生自身の端末 (パソコン等) を用いることにより、授業資料の確認や指定した映像を繰り返し視聴することが可能となり、福祉対象者への理解、支援のあり方等の理解をより深めることができた。また、学生の通信状況を踏まえた上で学生自身が主体的に考え、記述し、それを基に Teams の機能 (ブレイクアウトルーム等) を用いたグループワーク、ワーク内容をクラス全体で共有化し、個々にリフレクションを行うとする双方向の授業形態も取り入れるようにした。

工夫した点は、学生自身で考え、記述する時間を十分に確保すること、終了前の個々のリフレクション、次回授業内でのフィードバックを行うことにより、学修意欲の維持と成果を実感できるように配慮した。また、チャットを活用したことにより、学生自身が自らの意見や感想など積極的に回答する学生の様子も見られた。同時に学生からの質疑応答への対応も随時行うようにした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

返却されたワークシートから、学生自身が授業内容の確認と学修の成果を把握することができた（エビデンス①②）。実習関連授業では、自身の実習内容や課題を省察し、全体指導・個別指導を通じて、学生自身が努力すべき内容が確認された（エビデンス③）。

5 今後の目標（これからどうするか）

制度の改正が多い福祉の関連法の状況を確認し、最新情報・データを授業内容に反映させる。あわせて、保育士養成課程の新カリキュラムに合わせたワーク等の内容を随時変更・修正する。

今年度入学生より iPad が一人一台使用可能となったことを受け、授業内および自宅学習時の効果的な使用方法を考えたい。また、将来の進路先となる保育や福祉の現場で活用できるような ICT を用いた授業形態を模索していきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ①マイクロソフト Teams で提出されたワークシート（非公開）
- ②授業終了時に該当科目での自身の学びを記したペーパー（600 字程度・非公開）
- ③幼児教育学科の学修ポートフォリオ

ティーチング・ポートフォリオ

学科：生活文化 氏名：佐々木唯

(記入日：2021年9月28日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

住居学(2年生選択必修2単位)、家庭電気機械及び情報(3年生選択2単位)、生活デザイン論(選択必修2単位)、カラーコーディネート(1)(2年生選択2単位)、基礎ゼミナール(1年生必修2単位)、生活文化専門演習(3年生選択必修2単位)、情報処理(5)(2年生選択2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

現代社会の動向をふまえて、学生が自らの生活スタイルを創造できることを教育目標としている。そのために、住生活面から社会の歴史と発展過程を学び、生活の視点から問題を発見して、課題を解決する能力を養っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

講義では、学生が各自のテーマを分担してWebサイトを作成する課題を取り入れた。創造性を養うために考えを展開したり、まとめたり、それを受講者が交換することによって、考え方のスキルや自信を持たせることができた。

さらに、主体的な学習を促すため、身近なテーマを示し、例えば「健康と環境」に関わる問題の発見や課題解決の実践に取り組んでいる。オンライン授業では、Teamsを活用して事前学習を伝え、予習を前提に授業を進め学習への積極性、自主性を促した。さらに、Formsを通して学生の理解度を確かめ事後学習を示して主体的に復習が行えるようWebサイトを作成した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

Webサイトに授業内容の補足や要点をまとめ、QRコードやリンクを示すことによって、学生が閲覧するようになり、学習の自主性および事後学習の促しができる。授業アンケートによると、事前・事後学習の時間が確保され主体性も高まっている。学習の継続性、持続力を保つ工夫が必要である。

5 今後の目標 (これからどうするか)

学生の理解度を確かめ、知識の定着や補足をするため、学生の気付きに応じて復習を行えるようWebサイトの充実をはかりたい。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

Web 非公開 <https://sites.google.com/住居学、家庭電気機械、情報処理、生活の数>

学

ティーチング・ポートフォリオ

佐藤 真弓

(記入日： 2021年 9月 27日)

1 教育の責任

家庭経営学（専門教育科目必修2単位）、家族関係学（専門教育科目必修2単位）、現代の社会・ジェンダー研究入門（共通教育科目選択必修2単位）、食料経済（専門教育科目選択必修2単位）、ライフマーケティング演習（専門教育科目選択必修2単位）など

2 教育の理念

私の教育理念・目標は、現代社会における様々な諸相についてその本質的要因を探り考察し、それらを自分自身の生活課題としてとらえようとする主体性を養うこと、よりよい生活、人生を送るために、それら生活課題に対してどのような解決法があるかを考え、自分らしいライフデザインを構想し実践できる態度を身につけることを目的としている。

3 教育の方法（実践の工夫）

オンライン授業の場合—授業資料としてワークシート（word,excel）や pdf 資料を事前配信しておき、授業時には Microsoft teams の「会議」機能を利用しオンライン授業を実施した。授業会議では画面共有しワークシート、パワーポイントのスライドで解説した。その後オフラインの時間では自習、チャットによる質疑応答を実施した。毎授業後に小課題レポート、もしくは「forms」機能による小テストを実施し知識の定着を図った。「forms」機能を利用して、回答を提出後すぐに学生が自分の点数、回答に対する教員からのコメントがみえ、復習に役立てられるようにした。「課題」機能からの提出には一人ひとりフィードバックのコメントを付した。授業では前回授業の復習として小課題レポート、小テストの講評も行った。ライフマーケティング演習では、各々のレポートテーマを検討するために、teams の「ブレイクアウトルーム」の機能を用いて、少人数や個別のディスカッションなども行った。

対面授業の場合—ワークシートとともにパワーポイントのスライド、DVD など写真や動画を使用し、毎授業後に小課題レポートを作成させ知識の定着を図った。次の授業では前回の復習を兼ねて小課題レポートの講評を行った。家庭経営学においては、一つのテーマに基づいてグループごとのディスカッションを行うことにより基礎理論を押さえるとともに生活課題の発見や解決法について考えた。

4 成果（結果と評価）

講義科目については、ワークシート、パワーポイントのスライド等の使用と、会議機能を用いて授業解説を行えたことにより、学生が授業内容により興味をもって集中して取り組めたのではないかと考えられる。毎授業ごとの小課題レポートの提出や「forms」機能を用いた小テストの実施により知識の定着、生活課題の新たな発見などが確認できたが、幅広い視野からの課題設定や主体的な課題解決態度や意欲の育成までは至らなかったのではないかと考えられる。

演習科目であるライフマーケティング演習については、teams や対面の際の指導により、社

会調査法の理論を知り、実際にアンケート調査を実施しその分析結果をレポート、プレゼンすることにより実践応用力、表現力などを養うことができたと考える。

5 今後の目標

オンライン授業の場合や受講生が多い場合でもグループワークやディスカッションなどをさらに積極的に取り入れていきたい。資料や文献を使用した事前事後学修をより具体的に促す。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ワークシート、レポート（小課題、事前事後課題等）、パワーポイントスライド
- ・期末レポート
- ・佐藤真弓『生活と家族』一藝社（2016）
- ・佐藤真弓・齋藤美重子編『自然と社会と心の間人学』一藝社（2020）
- ・伊藤公雄他『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社（2016）
- ・（公社）日本フードスペシャリスト協会編『四訂 食品の消費と流通』建帛社（2021）
- ・フードスペシャリスト試験問題集
- ・web サイト（課題資料として）

消費者庁 HP <https://www.caa.go.jp/>

厚生労働省 HP <https://www.mhlw.go.jp/index.html>

令和2年人口動態統計

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/index.html>

農林水産省 HP <https://www.maff.go.jp/>

経済産業省 HP <https://www.meti.go.jp/>

外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

- ・YouTube 動画（課題資料として）

ベアテ FC2 Video <https://www.youtube.com/watch?v=KhA7FNwSdB0&t=192s>

移動スーパーとくし丸 ドキュメンタリー

<https://www.youtube.com/watch?v=ru-cXUjO-sA>

(記入日：2022年2月24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

前期：基礎栄養学 (1年必修科目 2単位)、ライフステージ栄養学 (2年選択必修科目 2単位)、人体の科学 (1~4年選択必修科目 2単位)、基礎調理学実習(1) (1年選択必修科目 1単位)、生活文化専門演習 (3年必修科目 4単位)、卒業研究演習 (4年必修科目 4単位)

後期：生化学 (1年選択必修科目 2単位)、基礎調理学実習(2) (1年選択必修科目 1単位)、食品学実験 (1年選択必修科目 1単位)、生活文化専門演習 (3年必修科目 4単位)、卒業研究演習 (4年必修科目 4単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が「食べる」というあまりにも身近で日常的に繰り返している行動について、生化学的視点で生命現象を理解し、自らの健やかな生活と生命を尊重する力を養うとともに、その専門的な知識を持って、どのようにして周りの人々の健康へ寄与できるのか主体的に考え行動する素量を身につけることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

オンライン授業では、学生が不安なく授業に参加できるように、授業内容の資料の他に、授業のタイムテーブルを記載した授業導入の資料をはじめに提示し、確認する時間を設け、タイムテーブルの通りに進行した。また、授業ごとにリアクションペーパー (Forms を使用) (エビデンス 1) を用い、授業内容の理解度を把握するとともに、質問については次の授業内で全て回答した。

2021年度後期には初めて、実験実習科目においてもオンライン授業を3回行うこととなった。基礎調理実習、食品学実験において、リアルタイム型とオンデマンド型のハイブリット型を取り入れた。すなわち、授業開始時にはリアルタイムで繋がりカメラをオンにしてお互いの顔を見ながら出席をとり、授業内容について確認をした後、オンデマンドで実習実験の映像を視聴させ、質問は teams の投稿やチャットを用いた。基礎調理学実習では、授業項目の入れ替えをし、自宅で調理しやすいものを先にオンライン授業で行った。オンライン授業で行ったメニューについては、対面授業になってからフォローアップをした。食品学実験では、授業項目の入れ替えをし、待ち時間が多く実験テクニックの少ないものについて先にオンライン授業で行った。映像の中で実験データを提示し、学生にはレポートを対面授業の時と同様に作成させた。

学生が主体的に学び考える機会を作るために、基礎栄養学・ライフステージ栄養学・生化学・人体の科学では、オンライン環境下で、映像資料 (Stream を使用) (エビデンス 2) や多くの図の資料を共有し、人体の仕組みや構造、生体内でどのような化学変化が起きるのか、その化学変化が生命活動や代謝にどのような役割を果たしているかなどについて、一番身近な自分自身の体として理解できるよう促した。

生活文化専門演習や卒業研究演習においては、グループワークや論文の輪読を取り入れ、学生同士がディスカッションする機会を設けることで、研究内容に興味を持ち自ら学ぶ意欲を持たせるよう促した。基礎調理実習や食品学実験においては、実験実習の内容と実験データについて、原理などと照らし合わせて考察し、論理的に表現することができるようレポートの指導を行い、事前事後の学習を促した。最終授業後にアンケート (エビデンス 3) を行い、授業の目的が達成されたか確認した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

リアクションペーパー (Forms を使用) (エビデンス 1) やディスカッションにより、学生が自らの健やかな生活と生命を尊重する力を修得し、周りの人々の健康へ寄与するために主体的に考え行動し、また自らの食生活がよい方向に変化していることが確認できた。人体の科学では、さまざまな学科の学生が受講していたが、栄養学に興味をもつようになった学生が多く見受けられ、授業を重ねるにつれて授業内容に関する質問に留まらず、多くの栄養学的な質問が寄せられた。この質問と回答について、オンライン環境下において受講学生全員と共有したことで、学生の興味と関心を引き出していたことが

リアクションペーパー（Forms を使用）（エビデンス 1）から読み取ることができた。

オンライン授業において授業のタイムテーブルを記載した授業導入の資料は、学生から授業の進行がわかりやすく安心して授業を受けることができたという感想が寄せられた。

実験実習のオンライン授業では、調理のデモや実験の操作説明、レポートの書き方といった実験の基礎説明について、対面授業に切り替わった後にも各自が復習したいタイミングで活用することができた。また自宅での調理は任意としていたが（食材にかかる費用や材料調達によるコロナウイルス感染を避けるため）、実際に自宅で調理する学生も見受けられた。材料調達や、足りない食材を別の食材で代替するといった工夫もみられ、対面授業では学ぶことのできない範囲まで学修できた様子が見受けられた。リアルタイム型とオンデマンド型を併用することで、学生の授業参加への一体感が生まれ対面授業への移行がスムーズであった。

生化学では、教科書以外の資料を、学生と教員が画面上で共有できたことによって、通常の授業よりも、メカニズムの説明が容易になり、通常の対面授業よりも学生が理解しやすい授業形態になったと感じた。

生活文化専門演習や卒業研究演習においては、研究内容に興味を持ち、自ら多くの資料や論文を検索して、科学的に考察する学生が多くみられた。実験実習においては、最終授業後のアンケートから、レポート作成の基本を身につけ、授業の目的が達成できたと回答する学生が多くみられた。

5 今後の目標（これからどうするか）

専門分野の知識の修得については、より理解しやすい資料を提示し、自らの生活に落とし込んだ説明を心がけ、学生に事前事後の学修を促すことで、理解できるように改善していく必要がある。2022 年度は、Forms を使用してクイズ形式で先に教科書に目を通すような工夫をし、事前学修にも重点を置いた授業形態を取り入れる。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1) リアクションペーパー（Forms を使用）（理解度のチェックと質問）（非公開）
- 2) 映像資料（Stream を使用）（人体の仕組みについての映像資料）（非公開）
- 3) 最終授業でのアンケート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 叶内 茜

(記入日：2021年9月29日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期：コミュニケーション能力基礎演習、保育実習演習Ⅲ（事前・事後指導）、子どもの食と栄養、家庭の健康学/女性健康学、生活文化専門演習、保育実習・教育実習先巡回指導

後期：保育実習演習Ⅰ（事前・事後指導）、保育学（実習及び家庭看護を含む）、保育実習演習Ⅲ（事前・事後指導）、食と生命（我孫子・目白）、女性学（目白）、総合講座(2)、生活文化専門演習、保育実習・教育実習先巡回指導

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標として、学生に身につけさせたい3つの力を挙げる。

- (1) 物事について主体的に調べ、発信していく力。
- (2) 多方面にアンテナを巡らし、正しい情報を選択する力。
- (3) 自身の生活と世の中の状況を結びつけ、生活課題を考えていく力。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

担当科目の共通事項

これまで対面授業時には「ふり返しシート」というポートフォリオ形式の記入シートを用意し、毎回の授業開始時に配布、授業終了時に回収していた。ふり返しシートには、学生が各自その日の学習内容についてふり返しや質問等を記入し、教員は次週の授業の冒頭で学生からの質問に答える形をとっていた。オンライン授業に切り替わってからは、Formsを活用して、ふり返しシートと同様のことが行えるように工夫した。

各科目の工夫

前期担当科目のうち、特に授業方法を工夫した科目について述べる。

・子どもの食と栄養

今年度より担当科目となった。反転授業に近い形式で実施し、オンライン期間にテキストを中心とした理論的な内容を扱い、対面授業時には調乳や離乳食の観察等の実技内容とした。

・コミュニケーション能力基礎演習

演習科目のため、ブレイクアウトセッションやチャット機能を通して、リアルタイム

で学生同士または教員との相互のやり取りができるように工夫した。また、オンラインの期間が続き、学生は以前よりも Teams のチャット機能やメールの使用頻度が高まったため、メールの文面の作成方法についての授業内容を新たに取り入れた。

- ・家庭の健康学/女性健康学

子どもの食と栄養と同様に、反転授業に近い形式で実施した。これまでは対面授業時に資料を配布する形としていたが、指定のテキストを用意することで、学生が次週の内容を予習できるようにした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

担当科目の共通事項

これまでふり返しシートの記入内容や記述量について学生による差が大きいことが課題のひとつであったが、Forms への入力形式となってからは全体として学生の記述量が増え、授業内容に関する質疑応答の機会も増えた。（エビデンス1・2）

各科目の成果

- ・子どもの食と栄養

反転授業に近い形式としたことで、テキストの内容を網羅することができた。（エビデンス3）しかし、当初の予定よりも座学と実技の期間が空いてしまったため、実技の際に復習を丁寧に行う必要があった。

- ・コミュニケーション能力基礎演習

ブレイクアウトセッションでは、教員が各グループを回ることにより少人数での指導が可能となった。また、こちらからの問いかけに対してチャットで応答してもらう方法は、学生も参加しやすいようであった。メールの文面に関する授業および課題添削後は、学生からのチャットの内容も体裁が整ったものが多くなった。

- ・家庭の健康学/女性健康学

テキストを導入したことで、学生は予習を進めやすくなり、オンライン授業時も過去の学習内容が参照しやすくなった。（エビデンス4）

5 今後の目標（これからどうするか）

2021年度前期は、紙ベースのふり返しシートとオンライン授業時の Forms の記録が混在する形となってしまった。学内の Wi-Fi 環境も整ったため、今後はふり返しシートではなく、対面・オンラインにかかわらず Forms に統一して学生の学習記録を蓄積していけるようにしたいと考える。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. ふり返りシート（非公開）
2. Forms の記述（非公開）
3. 学生の授業評価アンケート結果（非公開）
4. 『授業で現場で役に立つ！子どもの保健テキスト』（小林美由紀編著 診断と治療社）

ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 叶内 茜

(記入日：2022年2月8日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

前期：コミュニケーション能力基礎演習、保育実習演習Ⅲ (事前・事後指導)、子どもの食と栄養、家庭の健康学/女性健康学、生活文化専門演習、保育実習・教育実習先巡回指導

後期：保育実習演習Ⅰ (事前・事後指導)、保育学 (実習及び家庭看護を含む)、保育実習演習Ⅲ (事前・事後指導)、食と生命 (我孫子・目白)、女性学 (目白)、総合講座②、生活文化専門演習、保育実習・教育実習先巡回指導

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標として、学生に身につけさせたい3つの力を挙げる。

- (1) 物事について主体的に調べ、発信していく力。
- (2) 多方面にアンテナを巡らせ、正しい情報を選択する力。
- (3) 自身の生活と世の中の状況を結びつけ、生活課題を考えていく力。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

令和3年度は、次の3点を軸に授業を展開した。

①Forms を活用した授業のふり返り・質疑応答

前年度までの対面授業時には「ふり返りシート (エビデンス1)」というポートフォリオ形式の記入シートを用意し、毎回の授業開始時に配布、授業終了時に回収していた。ふり返りシートには、学生が各自その日の学習内容についてふり返りや質問等を記入し、教員は次週の授業の冒頭で学生からの質問に答える形をとっていた。オンライン授業に切り替わってからは、Forms (エビデンス2) を活用して、ふり返りシートと同様のことが行えるように工夫した。

②対面授業時のアクティビティの導入

対面授業時には、学生が対面で授業を受けることの意義が感じられるよう体験的な活動を意識的に取り入れた。例えば、「保育学」では乳児人形を用いた実習や附属保育園での実習 (エビデンス3) や外部講師による絵本の読み聞かせ (エビデンス4) の実習を行った。共通教育科目の「食と生命」では、栄養素の話と関連してアルコールパッチテストの実施や、アナフィラキシーショック発生時に用いるエピペントレーナーを用意し、希望者が手

に取れるようにした。「女性学」では外部講師を招聘し、より専門的な立場からデートDVや世界の女性に関する問題についてご講義いただいた。

③スライド・提示資料の工夫

学生のモチベーション維持のために、スライドではなるべく写真を活用することや、スライド自体の装飾を工夫した。毎回の授業の概要はA4用紙1枚にまとめ、印刷を希望する学生の負担にならないようにした。提示資料については、信頼できる配信元の動画を提示し、繰り返し視聴ができるように対面授業・オンライン授業にかかわらずURLをTeams上に記載した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

上記の3つの軸について、結果と評価を以下に示す。

①Forms を活用した授業のふり返し・質疑応答

これまでは、ふり返しシートの記入内容や記述量について学生による差が大きいことが課題のひとつであったが、Forms への入力形式となつてからは全体として学生の記述量が増え、授業内容に関する質疑応答の機会も増えた。（エビデンス1・2）

質疑応答についても同様に、授業の冒頭で20～30分ほど使い学生からの質問を丁寧に取り上げることで、回を重ねるごとに意欲的な質問が増えた。

②対面授業時のアクティビティの導入

対面時には実践的・体験的な活動を意識的に取り入れたことで、学生の授業評価アンケートにおいても体験的な活動を評価する記述がみられた（エビデンス5）。

③スライド・提示資料の工夫

特に「食と生命」では、さまざまな学科の学生が履修をしているため、それぞれの学生がなるべく自分事として捉えられるような例示を意識的に行った結果、学生のFormsの記述からは「自分の地元の話で興味が持てた」「将来自分が教員の立場になったときにも授業で紹介された動画を子どもたちに見せたい」等の記述がみられた。

5 今後の目標（これからどうするか）

Formsに寄せられた質問に回答することで、質問のある学生の意見は授業の中で紹介することができたが、受講者全体の意見・傾向を共有する機会はあまりなかった。今後は、リアルタイムで学生の意見が反映できるような授業の展開についても検討していきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. ふり返しシート（非公開）

2. Forms の回答 (非公開)

3. 2021 年度 川村学園女子大学 女性学研究所 教育研究奨励報告書「女性学・ジェンダーの視点から再考する建学の精神とその現代的課題」

4. 大学ホームページ 学科 NEWS

<https://www.kgwu.ac.jp/2021/12/10/%e5%ae%b6%e5%ba%ad%e7%a7%91%e6%95%99%e8%81%b7%e7%a7%91%e7%9b%ae%e3%80%8c%e4%bf%9d%e8%82%b2%e5%ad%a6%e3%80%8d%e6%8e%88%e6%a5%ad%e7%b4%b9%e4%bb%8b/>

5. 学生の授業評価アンケート結果 (非公開)